

蜷川 讓氏の近著について

大金久展

はじめに

戦後初期の早稲田大学全学自治会の委員長で、大山郁夫帰国促進運動の中心的な担い手の一人でもあったフランス文学者でロマン・ロラン協会代表の蜷川讓氏(23・政経)が『敗戦直後の祝祭日一回想の松尾隆一』(藤原書店 1989・5)という本を書いた。私のところばかりでなく、往年の早稲田の学生運動の関係者のところにも著者から相当広範囲にわたって購読のすすめがあり、かなりの人がすでに目を通していろいろだ。一読してその内容のひどさに驚愕した。大小とりまぜての誤りの多さ、往時の学友にたいする悪罵の数々、随所に見られる無断引用ないし盗用、おのれひとりとする高慢、昔日の颯爽とみえた著者の想像もしなかった一面を眼のあたりにして言葉を失った。これにたいして、「黙殺」を主張する友人もなかにはいるが、すでに抗弁すべくもなく故人となった先輩、友人も少なくない。その人たちのためにも最低限いすべきことはしておくべきだ、と思う。

「近親憎悪」の書

軽侮

この本の特徴の第一は、松尾隆の周辺にいた往時の学友たちにたいする「近親憎悪」ともいべき著者のあらわな敵意と、松尾隆の唯一の弟子はおのれ一人で、それ以外の人間には到底「師」を語る資格はない、という強烈な自己過信が目立つということにある。吉田嘉清は「警察大学にあこがれた男」で「知性に欠けている」(51頁)とか「田川は党籍を気にしながら文春の広告担当の取締役になつた」が「その存在は軽かった」、あるいは「柳沢良一も電通の取締役に昇進したが、先ばしりの田川と同型の人物」、「栗原光一郎はうっかり敵に情報を漏らす党員」(115頁)などという当時の党員学生への悪罵の羅列が端的にこれを示している。しかし、それ以上に凄まじいのが『松尾隆一早稲田の疾風怒濤の時代を駆け抜けた一教師一』(松尾隆教授記念行事会編 1986・12 新制作社)にたいする憎悪である。これはいうまでもなく、主として1950年のレッドパージ反対運動に参加した活動家たちが中心となつて刊行したのだが、これについて著者は「無定見な自費出版にありがちな誤りの多い記録集」で「師への敬意が欠けている」というコメントを巻末の「主要参考文献」のなかでつけている。おまけに「この書からの引用はQ書と略した」と書き、あたかも「いわくつきのウサンくさい本」であるかのように扱っている。

「破廉恥な無断引用」

ところが、著者は本文のなかでそのいわゆる「Q書」の誤りを具体的に指摘しているかという、それが全くないのである。これについてはただの一行の指摘もないばかりか、逆にそこから無数の引用を行っており、それなしには蜷川氏の本はできなかつたらう、と思われ内容なのである。

「Q書」からと明記しての引用は本文中の随所にある。順不同に列記すると、浅田光輝、宮(森)直治、武藤義男、久喜(西村)勝一、銀林浩、ピョン・ジェ・スからの引用はすべて「Q書」からのあまり上手でない引き写し(ほとんど丸写し)である。「Q書」から明らかに無断引用していると推測される箇所も少なくない。「稲が枯れるぞ」というプラカードの話、と「人民大学」のくだり(122頁)は武藤氏の『「復員学生」の渴いた心にしみていった松尾ぶし』からの無断引用に相違ないし、「雨の日は休講」というエピソード(188頁)は「Q書」巻頭の「我が友 松尾隆」(古在由重)から盗用した可能性が高い。

3頁近くにわたって引用され、末尾に(川添登『思い出の記』TEM研究所、発行)とある一文は「Q書」の「教授は学生が選ぶものだ」という川添氏の文章が初出である。「Q書」からの引用を少しでも小さくしたいという、これはみえすいたゴマかしだろ。蜷川氏にならって以後彼の本を「N本」と略称しよう。「N本」には「Q書」の「第三部 松尾隆の著作・講演」に収められている諸篇を利用した痕跡が明瞭に認められるが、著者は、故意にそうした事実を隠蔽しようとしている。その手口は前記川添登氏のケースと同様である。

例えば、「Q書」に収められている松尾隆の「雄弁会と私」という一文には「この原稿

は今回発見され、始めて発表される」と頭記されているが、「N本」はその引用の末尾に「取材先で入手、発行所不明」と記している。常識的には取材先は「松尾隆教授記念行事会」以外にはありえない理屈だが、具体的に「取材先」を明記していないのは面妖である。つきに、「N本」の「松尾隆著作目録」と「松尾隆略年譜」を「Q書」のそれを比較してみよう。

「Q書」巻末の「『松尾隆の著作・論文』〔解説〕」を担当したのは故石垣辰男だった。「N本」はこれに「ロレンスと肉体の道」一篇を加えている。これは石垣の見落としだったろう。しかし、それ以外は綿密な石垣の仕事の骨子をなぞったものなことは一見してすぐわかる。「N本」の「目録」は石垣の懇切な解説をすべて削ぎ落して文献のみを石垣の配列そのままに掲げたものにすぎないのである。

また、「略年譜」は松尾隆本人の自筆原稿をもとに和田陽一がまとめたものだが、これも「生誕」を「誕生」、「第一早稲田高等学院」を「早稲田大学付属第一高等学院」に書き改めるなどのほか格別新味のあるものではなく、「Q書」をなぞつたと断定してよい内容のものである。

『松尾隆教授記念行事会』についてのウソ』

ここで、改めて「松尾隆教授記念行事会」の仕事と蛭川氏とのかわりについて回顧してみよう。

N本の版元である藤原書店のPR誌・『機』の本年5号に『時代の証人一回想・松尾隆』という蛭川氏の一文が載っており、その冒頭にはこう書かれている。

「突然、『師松尾隆』という本を共同執筆でつくりたいと言って来た男がいた。十余年前のことである。だが彼は師について皆目わからず、革命運動への幻想だけで生きて来た男であった。無知で気負いだけの人たちが集まって軽率に師を語る非礼を自戒をこめて語り出すと、彼は「何を！……」と怒鳴り息巻いて帰って行った。それ以来『松尾隆の伝記』構想は私の道標となった。……」

これは、多分1985年晩秋のことだったろう。「革命運動の幻想だけで生きて来た男」というのはどうやら私のことを指しているらしい。

蛭川氏とはたしかに松尾隆「遺稿・追悼集」のことでパレス・ホテル一階の喫茶室で一度だけ会った記憶がある。話は並行線をたどり、2、3日中に返事をするというのでその日は別れ、のちに「やはり協力するのは見合わせる」という電話での返事をもらった、というのがあらましの経過であったろう。

私は旧政経学部の3年先輩で「黎明期の早大学生運動」の輝かしい指導者として日頃畏敬していた蛭川氏にかりにも「なにお……」などと怒鳴った記憶はない。これは明らかに誇張されたウソと断言できるが、この蛭川氏の虚言癖についてはあとで長瀬隆の項で触れたい。

「師について皆目わからず……」とか「無知で気負いだけの人たちが集まって軽率に師を語る非礼……」といった表現に知性のひとかけらでもあろうか。蛭川氏の主張は煎じ詰めると、われわれには「師松尾隆」を語る資格も能力もなく、そんな企ては不運だ、ということに尽きるようだった。蛭川氏の協力を仰ぐことは断念する以外なかった、と改めて痛感する。

蛭川氏にとっては松尾隆は仰ぐべき「導師」であり、これに仕える資格をもつ侍者は彼ひとり、余人などが近づくのはもつてのほか、これについて語るなどは「非礼」そのものなのらしい。

『初歩的な誤りの数々』

「Q書」について「無定見な自費出版物にありがちな誤りの多い記録集」と酷評する蛭川氏だが、その「N本」の随所に到底信じられないような誤りが多数見受けられるのはどうしたわけであろう。以下、逐項的に指摘していくことにする。

☆114頁で『自立会』を（出獄した人たちの集まり）と書いているのは初歩的な誤りである。「自立会」というのは徳田・志賀をはじめとする府中組が釈放後一時共同生活をしてきた本来は受刑者更生のための施設であって、手頃な本でいえば山辺健太郎の『社会主義運動半生記』（岩波新書）、杉森久英『徳田球一』（文芸春秋新社）、『ドキュメント・志賀義雄』（五月書房）などにこれにかんする記述がある。もちろんこのほかにも無数の文献があることはいうまでもない。

☆故栗原光一郎氏の入党はおそらく1949年頃のこと、つまり時事通信政治部記者時代のことであって、学生時代に党籍をもってはいなかった。(時通細胞の生き残りに証人多数。)だから115頁の学生時代すでに党員であったとする記述は正確ではない。

☆「三・四会が戦時中もほとんど毎月例会を開き戦後におよんだ……」(152頁)というのは疑問である。戦時中、たとえばそのうちの中心メンバーだった川添隆行、林利夫(元芝信用金庫理事長)、古藤利久三(元経団連専務理事)の三人は新潟刑務所におり、宮川寅雄は北海道にいた。「毎月の例会」など不可能な時代でもあった。三四会生き残りの一人川村統一郎氏(逗子に在住)もそう証言している。横浜事件ひとつみても「毎月例会」などできるわけがない。

☆1947年秋当時、「早大細胞の神山茂夫派の学生」(127頁)などというものは存在しなかったし、彼らが「暴挙を働いた」という事実もない。早大内神山分派といわれるものが結成されたのは正確には1951年3月であり、それは同年8月には解散されたというのが事実である。

☆『レーニン主義の諸問題』のモスクワ版が非公然のルートで日本にはじめて入ってきたのは1449年冬から50年初頭のこと、白土氏は1950年3月の卒業でその頃そうした「高度な研究会」には出てはいない。それ以前のことであればそのテキストは『レーニン主義の基礎』(ナウカ社版のパンフレット)のはずで、39頁の記述は両書を混同している。「スターリン—巻本選集」ともいべき『レーニン主義の諸問題』を松尾隆が入手したのは1950年以後のことであつた。

☆1950年当時の早大の党員数500とある(115頁)のは二重の誤りである。この年初頭のコミンフォルム批判と同年5月の細胞解散で党員数は最盛期から半減した。最盛期はおそらく1949年秋前後だが、500という数字には根拠がなく、総数約350名(第二学部細胞および秘密党員を含む)を超えるものではなかった。全学連グループの全国会議では「登録党員数350名、青共500名を擁するわが早大細胞は……」というのが報告の前の決まり文句だつた。これは1949年秋から翌年の早大細胞解散の日までその指導部の一員だった筆者が鮮明に記憶し、ほかでも書いていることで間違いない事実である。

☆「戦時共産党」という言葉が二ヶ所(149-151頁)にあるが、これは「非常時共産党」の単純な誤りである。「武装共産党」「リンチ共産党」などとおなじジャーナリズムの命名で、「風間指導部」のことであり、その粗忽なカン違いと思われる。

☆中村秀一郎の名が「専修大学教授」として出てくる(117頁)が、彼は1989年以来多摩大学情報経営学部長、3年前脳梗塞で倒れ、闘病中であり、「専修大学教授」というのは10年前の情報である。

☆236頁の(新製作社)は(新制作社)の校正ミス。

こうした誤りは子細に検討すればまだまだ見つかるだろうが、とりあえずこの辺にとどめる。これらは取るに足らぬ単純ミスとしてあえて仰々しく事挙げするまでもないこともかも知れない。しかし「松尾隆教授記念行事会」本に「無定見な自費出版物にありがちな誤りの多い記録集」なる判定を下しながら、これだけのミスがあるというのはどうしたわけであろうか。

「無視できない誤り」

つぎにほぼ「決定的に誤りと思われる点」のうち、ここではさしあたりつぎの2点を指摘しておきたい。ただし「原本」の2章「故郷、島原」と6章「比較文学者としての松尾隆」についてはここではその検討から省いた。これについては専門的な立場から松尾隆晩年の優秀な学生であった長瀬隆がより精密な検討を加えるはずだからである。

第一は、「その頃すでにできていた日本共産党早大細胞の園部実が党本部にやつてきて……」という記述(113頁)についてである。これによると、早大細胞は前後の文章から推察して1945年10月24日以前すでに結成されていたということになる。徳田・志賀らが出獄したのが10月10日、そしてそれから2週間足らずで早大細胞は結成されていた、という

のは到底信じがたいことである。そして、125頁の「松尾隆に入党をすすめたのは党本部にいた一年下級だった園部実あたりではないか?」ということも支持できない。いまでも現在の園部氏が党本部専従になったのは、1946年2月末の第5回党大会の後で、蜷川説だと松尾隆の入党は1946年2月以降のことになる。(園部氏は「すっかり忘れた」といつているが、これは当時園部氏の親友だった越智龍弥の姉(捨垣年子さん)も証言している)

「園部たちの軍学徒転入学反対運動を契機に急速に細胞結成の機運が高まりその直後に早大細胞は結成されたが、その会議で松尾さんは指導的な役割を果たしていた。その時期はおそらく10月末だったろう、全国の大学、高専、師範のなかではいちばん早かった」というのが寺尾説だが、これには異説もあって長瀬隆はそのすぐれた作品『微笑の沈黙』(晩聲社 1985)で1947年入党説をとっている。

また、松尾隆ともあろう人が学院一年生だった学生にすすめられて入党したというのはそれこそ「師」への冒涇そのものだろう。寺尾氏は明言を避けているが、寺尾氏はじめ早大で先輩の沼田秀郷(佛文中退)、杉本文雄(昭政経)といった人々の役割が大きかったと思われる。

また、松尾隆が早大細胞とつかずはなれずというような関係だったような書き方は事実と明らかに相違する。松尾隆は早大細胞ではいずれにせよかなり早い時期からの党員であり、50年分裂から全協までの時期、細胞解散処分之余儀なく党籍を失った以外、その死に至るまで共産党員(早大細胞所屬)でありつづけた。職域の党員が地域の活動に協力するという立場でその会合に出るということはあるが、それは早大細胞から居住細胞に移ったことを意味ない。「N本」のこれにかんする記述の不正確さは歴然としている。

第二に松尾隆の学院時代の親友だった西村勝一が風間指導部の家屋資金局長だった(149頁)というのも致命的な間違いである。公安調査庁資料、たとえば片岡政治の『日本共産党史(戦前)』などははつきりそう書いているが、それは当局がスパイ松村の犯罪を隠蔽するためにおこなったおつ造であることを西村氏はそのすぐれた自伝『私暦をひらく』(マルジュ社 1985)のなかで綿密に論証しており、大塚有章の『未完の旅路』(三一書房)にも詳しい記述がある。西村氏に触れながらその著書すら参照せずに知ったかぶりをする「無知」は相当のものである。

「長瀬隆」のこと

「N本」は松尾隆の遺稿のことで長瀬隆と面会予定日まで決めていたのに「一方的な面会キャンセル」を「突然電話で告げられ、今日にいたるまで、彼との面会は実現していない」と書くとともに「この長瀬は、木寺没年時の弟子筋の早大生であるらしい」とのべている(237頁)。長瀬が昭和33年一文露文科の卒業生であることは「早稲田大学校友会」の「会員名簿」にも記載されていて疑問の余地はないし、彼の作品や訳書などにもはっきり明記されている。この長瀬と蜷川氏は二度の電話のやりとりうえで96年の2月に会い長時間話しかつているが、これは長瀬が詳しくその経緯を書きはずである。長瀬はその本の折に彼の『微笑の沈黙』(晩聲社 1985)を寄贈しているが驚くなかれ、蜷川氏はその本から無断引用をやつてのけているのである。176~177頁の岡沢秀虎に関する叙述が長瀬の作品からの盗用なことは両者をひきくらべれば歴然していると断言できる。

また、不思議でならないのは蜷川氏が松尾隆の唯一の弟子をもつて任じながら「松尾隆教授記念行理事会」が収集・整理に着手する以前、その卒業論文を含む遺稿に全く接していないのはどうしてなのか、ということである。

その気になれば没後30年の間に蜷川氏ならいくらでもその遺稿に触れる機会はあるはずである。しかし、そうした作業を蜷川氏は一切しなかつた。「松尾隆教授記念行理事会」にたいして憎悪の念をもちつづけ、これに悪罵を放ちながらこれに凭れきつて書いたのが蜷川氏の今度の本だ、といえよう。

むすびにかえて

以上は取り急ぎ気のついた点について「走り書き」したもので、十分の推敲を経たものではない。まだ、指摘すべき点もは多々あるがそれは後日に譲りたい。

(1998・6・9)